

令和6年度

栃木県公立小中学校事務職員

研修会並びに総会



令和6年5月31日(金)、令和6年度栃事研研修会並びに総会が、宇都宮市文化会館において開催されました。コロナ禍を経て、5年振りに以前のおりに実施できました。

開会式には、栃木県教育委員会、栃木県小学校長会長様をはじめ、多数のご来賓に出席を賜りました。

総会では令和5年度の事業報告・決算報告、令和6年度の事業計画・予算案、役員改選について、事前に行った書面評決により全て承認されました。

また質疑では、栃事研のビジョンや研修の在り方、予算についてなど多数のご意見ご質問をいただきました。

今後も経費削減を進めながら、会員の安定確保による活動の充実を目指すとともに、最重要課題である学校経営参画に向けた研究・研修の推進を図っていききたいと思います。



「第55回関ブロ群馬大会 第2分科会報告」

研修会ではまず、令和5年度学校事務研究大会で報告した内容の振り返りと、令和6年1月に行われた関ブロ群馬大会分科会討議の概要報告が行われました。

とちぎの事務職員の現状とこれまでの栃事研の取組について説明したあと、経営参画を果たすために必要な力量として、「マネジメント」「共同学校事務室」「熟議」の3つの要素と、参画に必要とされる様々な力量、それらを効果的に身に付けていくために見直された研修の体系化が示されました。

続いて、シンポジストに作新学院大学人間文化学部特任教授 浪花 寛 氏、宇都宮市立ゆいの杜小学校 石渡事務長、真岡市立中村小学校 上野主事、栃事研研究部 鈴木副部長をコーディネーターに行われた分科会討議の報告がありました。「学校経営参画に必要な力量とは」、「共同学校事務室及び市町事務研究会の役割について」の2つの論点を設定し、提案内容の具体に迫ることをねらいとして、2人の実践報告と、それに対する浪花先生からのご助言が紹介されました。

最後に研究部長から、今の学校に何が求められていて、事務職員として何をしなければならないのか、できるようになるには何が必要か考えながら実践を積み重ね、振り返り、更に実践を重ねることが必要とのまとめがされました。



「持続的に発展できる学校を目指して

～事務職員による学校経営参画の在り方を考える～



作新学院大学人間文化学部特任教授 浪花 寛 氏より「持続的に発展できる学校を目指して～事務職員による学校経営参画の在り方を考える～」と題してご講話をいただきました。「学校経営に参画する事務職員像のイメージを豊かにする」というねらいのもと、大きく2つの手立てについてお話いただきました。

前半は、学校組織マネジメントへの事務職員の参画の在り方についてのお話でした。まず、「学校経営に参画する＝学校で働く人と関わっていくことである」と述べられ、学校組織マネジメントの構造と手段を理解すること、求められるトップリーダー像(校長)、サブリーダー像(副校長)、ミドルリーダー像(中堅教職員)を理解することが重要であるとお話がありました。求められるリーダー像を理解することで、各リーダーが目的を達成するために事務職員としてすべきことは何か考え、行動することが学校経営に参画することになるとのことでした。

また、事務職員は一人職であることから経験年数が浅いうちからミドルリーダー的役割を求められることが多く、経営層である管理職と実践層である教職員をつなぐ役割をどのように果たすべきか起案の事務処理を例にあげてご説明いただきました。

まとめとして校長が設定した学校目標をみんなで共有すること、常に“目標を達成するために”という意図をもって一緒に働く人と関わり、普段の仕事や行事の運営にあたることが大切であるとお話をいただきました。

後半は事務職員のカリキュラム・マネジメントへの関わり方についてのお話でした。まず、新たな指導要領は「何ができるようになるか」を考えているものであり、これからのカリキュラムは「育成する資質・能力中心」であるという説明がありました。続いて、カリキュラム・マネジメントの意味や、教科横断的視点についての説明、カリキュラム・マネジメントの具体事例の紹介がありました。また、カリキュラム・マネジメントについて公立小中学校の現状や、学校間格差があることを指摘され、自校の現状理解と取組状況を踏まえた上で、学校内で共通認識を深めながら、持続的に実践することが大切であるとお話がありました。

最後に、教員とは異なる視点・リーガル・マインドに基づく指摘や提案、経済面の対価効果を考慮できる事務職員の貴重性と希少性を活かし、学校経営に参画してほしいとお言葉がありました。事務職員に求められている力量は、教育機能の拡大と業務の効率化を両立する力であり、カリキュラム・マネジメントと働き方改革は相反する目標だが、両立することが求められているとまとめられ、自信と誇りをもって力量を高めてほしいと励ましのお言葉をいただきました。

